chojiai.jp

みっちゃん。

こう呼びかけると、カウンター越しにふっと目じりを下げて、「はいよ」と返してくれる気がいたします。お別れの会の朝、ここに集まってくださった皆さまに、まず心からお礼を申し上げます。祖母・山本美智子、みっちゃんと過ごした時間を、言葉にしてお返ししたいと思います。うまく焼けるか自信はありませんが、心を込めて、今日だけは私なりの一本の“食パン”に仕上げるつもりで、ゆっくりお話しさせてください。

訃報に接したあの日、商店街の角に立ち止まると、風に乗ってくるはずの香りがありませんでした。朝の空気の中に、湯気のような優しさがひとつ欠けている。胸の奥が急に冷えて、手に持っていた紙袋の取っ手がひどく頼りなく感じられたのを覚えています。けれど店の前に立つと、シャッターに映る朝の光が、オーブンの赤い灯りみたいで、思わず「おはよう」と声が出ました。みっちゃんの「いらっしゃい」と「おかえり」は、私たちの街の合言葉でしたから。

みっちゃんは、1942年に堺で生まれ、浩じいじと一緒に小さなベーカリー「みちのパン」を開きました。じいじが先に旅立ってからも、みっちゃんは変わらぬ時間に店の灯りをともしました。季節ごとに酵母の機嫌をうかがい、ぶどう、柚子、金柑、いちじく、果物の“息づかい”を聴くみたいに、静かに仕込みをする人でした。「温かいものは温かいうちにね」。よくそう言って、焼きたてをためらいなく半分に割り、誰かの手にそっと押し込んでいました。

私にとって何より忘れられないのは、夜明け前の仕込みの時間です。まだ店の奥が青い暗さを残すころ、粉の匂いが少しずつ甘くなり、金属のボウルが小さく鳴ります。私の手が冷たくかじかむと、みっちゃんは無言でオーブンの前に連れていってくれました。扉の小窓から出る熱に、頬がじんわりほぐれていく。しばらくして、カカオの香りがするホットミルクを、湯気ごと手渡してくれました。言葉は少ないのに、あの一杯で「大丈夫」が体

の芯まで届く。あの朝の湯気は、私のなかで今も消えません。

chomar.jpであなただけの弔辞を作成

店は、パンを買う場所でありながら、誰かの一日を立ち上げる場所でした。みっちゃんは、初めて来た方の名前を必ず覚えて、次に会ったときにはもう「〇〇さん、お元気そうやね」と声をかけました。受験生には「脳みそはブドウ糖で動くんや」と角食の端を厚めに、夜勤明けの方には「今日は早めに寝なあかんで」と柔らかいロールを。言葉もパンも、その人に合わせて焼き上げるのが、みっちゃんのやり方でした。

「分け合えば二倍、美味しさも気持ちも」。この口癖は、災害の折にいちばん強く表れました。停電が長引いた朝、オーブンが動くうちにと、店にあった材料を惜しまず使い切り、焼けたそばから紙袋に詰めて外へ出しました。値札の代わりに、袋の片隅に小さな笑顔マークを描いて、「ほな、温かいうちにね」。前に並ぶ人も、後ろに並ぶ人も、なぜだか皆さん肩が少し軽くなって、家路につかれたように見えました。あのときの紙袋の感触を、私たちはずっと忘れないと思います。

パン屋の仕事に、終わりの鐘はありません。発酵は待ってくれないから、と笑いながら、みっちゃんは自分の時間を人の時間に合わせる名人でした。それでも、パンだけの人ではありません。商店街の朝清掃に一番乗りでほうきを立て、合唱の練習では隣の人の息づかいに耳を傾け、俳句では粉や湯気や季節の果実を五七五にのせて遊びました。柚子ジャムを煮る日は、台所じゅうが金色になって、鍋の中の泡が小さな鈴の音みたいに弾んでいました。「音で火加減がわかるねん」。そう言って、目より先に耳を澄ます人でした。

みっちゃんの面倒見の良さは、家でも店でも変わりません。私が失敗して、仕込み表をぐちゃぐちゃにしてしまった日のこと。彼女は眉ひとつ動かさず、「次は半分の失敗でいい」と笑いました。その言い方に、私は救われました。ゼロにしなさい、ではなく、半分でいい。完璧を求めず、昨日より少し温かく、昨日より少し軽やかに。パンも人も、そのくらいがちょうどええ。みっちゃんが教えてくれたのは、発酵の待ち方であり、人の待ち方でした。

chojan.jp であなただけの弔辞を作成

「みちのパン」の裏口には、家族の出入り用の小さな鈴がついていました。ガラン、と鳴らすたび、みっちゃんは必ず「おかえり」と言ってくれた。仕事帰りの父にも、部活帰りの私にも、時には落ち込んで戻ってきた近所の子にも。焼きたての香りと一緒に戻るその言葉が、どれほど私たちの背中を温めてくれたか。今日ここに来てくださった皆さまが、一番恋しく思うのは、きっとあの声と、袋の隅の笑顔マークだと思います。

家族のことにも、ひとつ触れさせてください。夫の浩じいじと二人で始めた店は、長男の誠さん、次女の玲子さん、そして六人の孫たちにとって、居場所であり学校でした。粉の重さを知り、手の温度を知り、誰かの朝を思い浮かべる想像力を知る。台風の日も、夏祭りの夜も、みっちゃんはいつも真ん中で、でも決して前に出過ぎず、みんなを見守っていました。ご家族の皆さまの胸の内を思うと、言葉が追いつきません。それでも、みっちゃんが残してくれた“やり方”、温かいものは温かいうちに分け合うこと、名前を呼ぶこと、半分の失敗で前に進むこと、は、これからの毎日にきっと力をくれるはずです。

最後に、ひとつだけ、私のわがままを。今日は会のBGMに、みっちゃんが好きだった合唱曲「ふるさと」が流れています。お別れの前に、もしよろしければ、皆さまで一節だけ、小さな声で口ずさんでいただけたら嬉しいです。みっちゃんが指揮者でも伴奏者でもなく、そばでそっとハミングして、全員の息がそろうのを待っている姿が、きっと浮かびます。

みっちゃん。長い朝を、ありがとうございました。あなたの「おはよう」と「おかえり」は、商店街の屋根瓦みたいに、私たちの毎日を支えてくれました。明日からは、私たちが受け継ぎます。ドアの鈴が鳴ったら、少し大きめに「おかえり」と言います。袋の隅には、小さな笑顔を描きます。誰かが冷たい手で帰ってきたら、オーブンの前に連れていって、カカオの香りのミルクを渡します。あなたがそうしてくれたように。

どうか、安心して休んでください。焼き上がったパンを布巾で包むみたいに、私たちはあなたの思い出を大切に包み、必要なときに温め直します。今日までの「ありがとう」を、明日からの「いただきます」で、何度でもお返ししていきます。

みっちゃん、行ってきます。また、ただいまを言いに戻ってきます。

この弔辞は chojiai.jp
で作成されました。いくつかの質問に答えて、今すぐあなただけの弔辞を作成しましょうc
hojiai.jp

chojiai.jp であなただけの弔辞を作成